

日本式幼稚園とインターの “いいとこ取り”を実現！

HILLOCK（ヒロック）式 バイリンガル教育レポート



はじめに

この度は、**日本式幼稚園とインターのいいとこ取りを実現！『HILLOCK（ヒロック）式バイリンガル教育レポート』**を手にとっていただき誠にありがとうございます。

このレポートでは、「日本人として和の心も持ちながら、英語で世界に羽ばたいて欲しい」と我が子に願うお母さん、お父さんの為に、どのようにして日本で育ちながら、日本語・英語を使い分けコミュニケーションが出来る「バイリンガル」に育てていくのか？

その「教育法」についてHILLOCK（ヒロック）で行われてる『教育法』をベースにご家庭でも参考になるバイリンガル教育法をまとめました。

ぜひ今回のレポートを読んで頂き、そして、お子様と楽しみながらバイリンガル教育に取り組んで頂ければと思います。

そして、このレポートがあなたのバイリンガル教育に役立つことになれば、私としても非常に嬉しいです。

どうぞよろしく申し上げます。

HILLOCK代表 堺谷武志（さかいたに・たけし）

～目次～

はじめに：ご挨拶

その1：バイリンガルとは？（p4～）

- ・バイリンガルの定義
- ・バイリンガルになるメリットとは？
- ・バイリンガルにもレベルや程度がある
- ・レベルや程度の考え方
- ・バイリンガルのレベルの目標

その2：子供はどうやって「言語」を習得するのか？（p8～）

- ・子供の母語（＝日本語）習得方法
- ・英語をどのように学ばせればいいのか？
- ・子供の発達段階に応じた目標の持ち方や進め方
- ・参考：大人にとって英語はなぜ難しいのか？
- ・日本語とはまったく異なる言語体系「英語」
- ・心理的な壁

その3：幼稚園とインターのバイリンガル教育における「メリット・デメリット」（p14～）

- ・日本式幼稚園（メリット・デメリット）
- ・インターナショナルスクール（メリット・デメリット）

その4：ヒロック式「バイリンガル教育」（p18～）

- ・①完全英語
- ・②少人数制
- ・③自然とのふれあい
- ・④STEAM教育

その5：最後に（p25～）

その1：「バイリンガル」とは？

改めましてこんにちは、HILLOCK代表の堺谷（さかいたに）です。

私の自己紹介は最後にして、長く教育業界に従事していると、ありがたいことに多くのお母様、お父様から多くの質問を受けます。

その中でも「うちの子、バイリンガルにさせたいんです！」という質問を一番多く頂きます。

こういう教育熱心な保護者様は、教育に携わる私としても非常に嬉しいのですが、まず『バイリンガルとは何か？』について理解し、そして「どのバイリンガルレベル（目標）」に向かって自分の子供を育てるのか？によって日頃のアプローチも変わってくると私は思います。

そこで、**「その1」**では、「バイリンガルとは？」という定義から、「バイリンガルレベルの違い」について述べ、あなたがバイリンガル教育を行う上で、目標設定をしやすい様にしたいと思います。

【バイリンガルの定義】

「バイリンガル」が一体何をさすかの定義づけはとても難しいのですが、ここでは**「二ヶ国語をきちんと使い分けて、コミュニケーションができる人」**と定義します。

ですので、バイリンガルとは、一般的に考えられているような、帰国子女やインターナショナルスクール出身者だけの話ではなく、第二外国語での一定以上のコミュニケーション力を持つ人を指します。

よって、日本をベースに過ごしていても、日本語とプラス何か他の言語（ここでは「英語」）をきちんと使い分けてコミュニケーションが出来れば、「バイリンガル」であるということになります。

【バイリンガルになるメリットとは？】

本題に入る前に、「バイリンガルになるメリット」について先に考えたいと思います。あなたはどんなメリットがあると思いますか？

単に英会話ができるといった技術の話を超えて、ツールとして使いこなすことで世界や人とのつながりが広がっていくという点が醍醐味だと私は思っています。

《バイリンガルになる主なメリット》

- ・ 英語（＝世界の共通語）を学ぶことで、世界や知識が広がる
- ・ 異なる人や文化に触れることで人生が豊かになる
- ・ ものごとを相対化する能力が高まる、など

【バイリンガルにもレベルや程度がある】

ここからが大切な話です。一概にバイリンガルと言っても、レベルや程度があります。

一見、いわゆるペラペラに話しをしているように見える人でも、語学における4つの全ての技能（聞く・話す・読む・書く）において2言語とも完璧なレベルに達しているバイリンガルはさほど多くはありません。

ここでは主な分類について整理しておきますが、分類自体はさほど重要なことではなく、まずは「バイリンガルにもレベルがある」ということを理解しておいてください。

【レベルや程度のお考え方】

では、「バイリンガルにもレベルがある」と理解して頂いたと思いますので、次にどの様にそのレベルを考えていくか？を詳しく「2つの考え方」から見ていきます。

《各言語の発達段階に応じたレベル》

2言語のうち、それぞれの言語の”発達レベル”によって分類する方法です。

2言語とも年齢相応に発達している、1言語は年齢相応に発達しているが、もう1言語は使えるが年齢相応レベルまでは届かない、といった分類です。

最も問題になるのは、”2言語とも年齢相応に発達していない”という場合で、例えば、バイリンガル教育を目指して、英語漬けにしようと思ったけど、結局、英語も日本もどっちつかずになってしまったというケースです。

それを避けるためには、片方からで良いので、目指す言語の発達レベルをまずは達成させるなど、発達レベルの意識を持つことが大切です。

《4つの技能毎におけるレベル》

次に、より細かく「技能」毎に発達レベルが異なる場合の分類です。

たとえば、聴けるが話せない、話せるが書けない、全てできる、などです（例えば、日系二世などで、両親の話は日本語で聴くが、返答するのは英語といった例もあります）

あと、少し切り口は変わりますが、今や英語は世界の共通語です。

ですので「色々な英語」がある（例えばアジア諸国の人たちが話す英語など）、あるいは時代の進展と共に変化がある（例えば、ホームページやEメール上で使う英語など）ということも理解していただき、バイリンガルのイメージを固定化しないでいただきたいと思います。

ここでのポイントは、英語4技能それぞれをどのレベルに持っていくかに着目するということですね。

【バイリンガルのレベルの目標】

したがって、一概にバイリンガルと言ってもどのレベルの獲得を目指すかで、取り組み方も変わってきます。ですから目指すレベルの目標を持つことが大切です。

例えば、海外旅行で苦勞しない、職業で活用できる、論文をかけるレベルなどです。子供の場合、漠然とでも親の希望としての将来目標をもつことになります。

たとえば、日本の教育を受けるという前提なら、次のような目標はいかがでしょうか。

「日本人としての軸（言語・文化）を持ちながら、第二外国語としての英語で相応に高度なコミュニケーションすることができ、それをEnjoyできる」

です。

さらに具体的なイメージを持つためには、あくまで現時点での親としての希望としてですが、将来本人が望めば**「大学相当の教育で海外留学ができるレベル」**というのもひとつの目標になりえると思います。

あるいは、ネイティブレベルの英語を（日本の教育に優先して）目指すのであれば、インターナショナルスクールへの通学や早い時点での長期海外留学など異なる学習環境（ひいては社会環境）を整える必要があります（**当然ながら、逆に日本語教育をどうするかを考える必要はあります**）

ですので、ここで一度、「あなたのお子様のバイリンガルレベルはどこを目標にするのか？」について言語化出来るレベルまで考えてみてください。

それが出来ると、お子様への今後のアプローチが少し明確化するでしょう。

その2：子供はどうやって「言語」を習得するのか？

「その1」を読んで、お子様へのバイリンガル教育の「目標設定」がある程度イメージ出来たと思います。

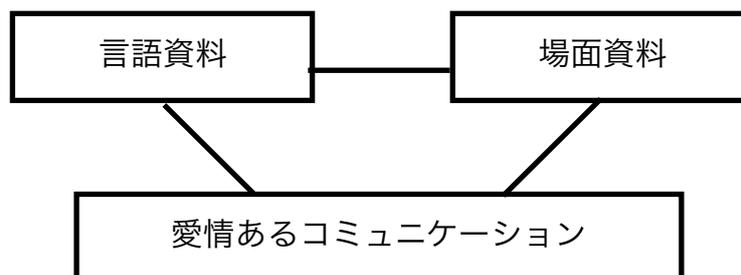
「その2」では、「子供の言語習得プロセス」についてお話しします。そして、そのプロセスを元に、「子供のバイリンガル教育における抑えるべきポイント」について解説します。

そのポイントを知っておくと、むやみやたらに、本を読ませたり、音楽を聴かせたりするのではなく、ちゃんとした言語習得プロセスに従ったアプローチでバイリンガル教育を行うことができます。きっと、ご家庭でも楽しみながらお子様の成長を感じられると思います。

【子供の母語（＝日本語）習得方法】

子供はいったいどうやって言葉を覚えていくのでしょうか？

まずは、母語習得の簡単な考え方を紹介します。乳幼児は、以下の3つをベースに言語（母語）を習得していくと言われています。



ここで大切なのは、**まずコミュニケーションがベースにあり、言語はコミュニケーションのツールとして介在する**ということです。

実際にコミュニケーションの一定の部分は非言語コミュニケーション（行動、しぐさ、表情など）によるものですし、乳幼児の場合は言葉が出る前はこれが全てです。

その上で、言語資料（子供に語りかける言葉）、場面資料（様々な状況とそこで交わされる会話など）を大量に吸収することで、ツールとしての「言葉（言語）」が習得されていくのです。

【英語をどのように学ばせればいいのか？】

では、上記のような点も踏まえ、子供のバイリンガル教育を実際に進めるには、以下の3つのポイントを押さえていくことが必要となってきます。

- ①幼少期にはじめる（聴く力が強い、心に壁がない）
- ②一定量のインプットを行う
- ③愛情ある生きたコミュニケーションの場・機会を確保する

です。

【子供の発達段階に応じた目標の持ち方や進め方】

とは言うものの、実際の目標の持ち方や進め方は、「幼少期」と「それ以降」に分けて考えた方が良いと私は考えます。

と言うのが、例えば「②一定量のインプット」で考えると、「英語をインプットさせないと！」と意気込んでしまい、子供への愛情や過度な期待からか「過度なインプット」になってしまうと「英語嫌いになる」原因にもなりかねないからです。

お子様が英語嫌いになってしまっても、努力も水の泡です。そうならないためにも「適度な期待」と「バランス感」と「細く長く楽しく」がキーワードになると私は感じています。

まず、幼少期においては「聴く力」「楽しむ」ことを意識して、以下の2つの方法で進めるとよいでしょう。

《幼少期》

①母語を習得するのと同じ方法

幼児の言語習得能力の高さを活用し、母語を習得するプロセスと同様の方法で習得していきます。

すなわち、多くの言語資料・状況資料を与え（聞く）、コミュニケーション（遊ぶ）する環境を整備します。

②第二外国語を学ぶ方法（上記プラスアルファの取り組み）

同時に、スクールや教材を活用して、第二外国語を学ぶ際に効率的な方法も取り入れます。

例えば、音楽やダンス、フラッシュカード、運動、ゲームなどは、子供が楽しみながら英語の触れるのに適した方法です。

できるだけ「1) 触れる機会を増やすこと」「2) 継続させること」により、「外国人とのコミュニケーションを楽しむ」「英語独特のリズム・発音に慣れておく」「簡単な挨拶や言葉を理解し、いくつかは使えるようにする」ことを当面の目標におくといいでしょう。

《それ以降》

幼児期を過ぎた後は、長期的な視点を持ち、20歳くらいに大きな成果が得ることを意識して学んでいきましょう。

相当の英語環境を準備しても、社会、教育、家庭環境が日本語である場合には英語に触れる絶対量に制約があるため、いきなりネイティブ・スピーカーのようになることは困難です。

また、子供は「覚えやすく、忘れやすい」ため、長く続けていくことがポイントになります。

高度な英語力の習得には、最終的には本人の強い動機（「留学したい」「原書を読みたい」「映画を字幕なしで見たい」など）を元に多くの努力を要することになります。

現実問題として、大学入学までには、受験や他のやりたいことなどで、継続的に英語ばかりをやることは難しいと思いますが、本人が本気になった時に「英語を幼少期から続けてきたこと」が大きな下支えとなります（その時、子供から大きく感謝されることでしょう）

- ・適度な期待は必要（但し、過度の期待は逆効果）
- ・あせらない（話す・読む・書く力はある程度まで後からつけることも可能）
- ・聴く力も一定レベルまでは可能（聴く力については幼少期に獲得して維持する方がメリット大。音楽や楽器に類似）
- ・話す、読む、書くは年齢に応じた対応を行う
- ・高度な習得には、最終的には本人の強いモチベーションが必要

親の関心や環境設定は、スポーツ選手や音楽家などの例を引き合いに出すまでもなく、子供のあこがれや価値観に大きく影響してきます。

まさにキーワードである「適度な期待」と「バランス感」と「細く長く楽しむ」を意識してもらえればと思います。

【参考：大人にとって英語はなぜ難しいのか？】

少し話はズレますが、なぜ大部分の日本人の大人にとって、英語は難しいと感じるのでしょうか？

学校の英語教育が未整備によるものもあるでしょう。

多くの日本人の大人は「中高大で勉強したのに、英語が話せない。」という不満を持っていて、英語を難しいと感じていると思います。

【日本語とはまったく異なる言語体系「英語」】

ただ、私が思うのが、根本的な要因としてやはり英語はそもそもが「**日本語とはまったく異なる言語体系**」である点です。よく言われるのが次のような違いです。

- ・文法：語順などがまったく異なる
- ・発音：音の数と種類の違い（RとL、OとU、SとShなどが代表）
（実際には、喉、肺、腹の使い方も異なります）
- ・文字：表音文字と表意文字（漢字）の違い
- ・リズム：積み上げ式と詰め込み式（リエゾンも聞き取りが大変）
- ・スピード：一般に英語の方が単位時間当たりの情報量が多い

その根本的な違いによって「文法をつい気にしてしまう」「文字を浮かべないと発音ができない」「速すぎて聴き取れない」などは多くの日本人にとって、仕方がないことだとも言えます。

これは、「知識」としての英語は知っているが、「ツール」として使えるところまで到っていない、ということです。

言葉が「ツール」である以上、他のツール（道具）と同様に「使ってみて慣れること」が大切になります（自転車の乗り方と同じようなものです）

【心理的な壁】

あと、「日本人の大人あるある」なのですが、実際に英語を使う際に、言語体系の違いといった技術論の前に、異なる人種とのコミュニケーションの際に生じる「心理的な壁」のようなものを感じる傾向にあります。

あなたは同じような経験はないでしょうか？

人は自分の知らないこと、それまで蓄えてきた知識や経験と違うこと、に出会うと反射的に違和感を覚え不安になってしまいます。

これは知らない人、言葉、カルチャーの違いに出くわした場合でも同じです（逆に言いますと、心理的な壁のようなものを突破して「違いを理解し、楽しむ」ということができるようになるというのがバイリンガルになる醍醐味とも言えます）

また、その「心理的な壁」は、幼い頃はまだ出来にくいので、その点においても、やはり英語は幼少期に始める方が有利ですね。



その3：幼稚園とインターのバイリンガル教育における「メリット・デメリット」

「その1」で「バイリンガル教育の定義や目標設定の考え方」がわかり、その2で「バイリンガル教育を進める3つのポイント」がご理解できたと思います。

その「3つのポイント」だけおさらいしておくと、

- ①幼少期にはじめる（聴く力が強い、心に壁がない）
- ②一定量のインプットを行う
- ③愛情ある生きたコミュニケーションの場・機会を確保する

でした。

で、今、あなたのお子様は幼稚園に入っている、あるいはこれから幼稚園に入園予定だと思われます。

今回の「**その3**」では、バイリンガル教育を行う上での、日本式幼稚園とインター（＝インターナショナルスクール）での『メリットとデメリット』についてお話ししたいと思います。

【日本式幼稚園（メリット・デメリット）】

まずは、「日本式幼稚園」から解説します。

《メリット》

- ・お金がかからない
- ・保護者になじみのあるスタイル
- ・日本語能力の発達はもちろん○

《デメリット》

- ・幼稚園自体にはバイリンガル教育は期待出来ない
- ・日々のほとんどを日本語で過ごすことになるので、全体的な英語教育がどうしても限られる
- ・クラスの人数も多いので、生きた1人1人とのコミュニケーションが少なくなってしまう

《その他補足として》

- ・集団主義的教育のため、個性を伸ばしにくい
- ・STEM（理系）教育などの先進の学びへの取り組みは少ない傾向にある
- ・保育士も送迎も女性が多く、女性的な世界になりがち

《まとめ》

日本語教育ベースになるため、日本語、英語がどっちつかずになる最悪のケースは避けれるものの、どうしても全体的な英語教育が限られてしまいます。

ただ、英語系アフタースクールとの掛け合わせや、幼少期からご家庭で英語に触れる機会を増やすなど、家族のフォローアップによっては、子供が英語を好きになり、英語の聴く力も身につき、長期的にバイリンガルに育つことももちろん可能です。

【インター（メリット・デメリット）】

次に「インター（＝インターナショナルスクール）」におけるメリット、デメリットに関して解説します。

《メリット》

- ・子どもに無理な負荷がなく、自然な形で大量の英語にふれられる（5時間×週5回→3年間で3000時間）
- ・幼い時期（耳が柔軟で、心に壁が小さい）から英語に触れることが出来る

- ・基本、少人数制を取っているので、自分の意見を表明しやすく、自己肯定感が育ちやすい
- ・長期的に様々なメリットがある（世界が広がる、心が豊かになる、強みができる、複数の視点を持てる。それにより思考力や感性が磨かれる、など）

《デメリット》

- ・金額が高い
 - ・日本人にはなじみのないスタイル（飛び込むのに勇気がいる）
 - ・英語と日本語のどちらもが中途半端になるリスクがある
 - ・ネイティブでないことから「家でも英語教育をしないといけない」という衝動に駆られてしまう
- よって保護者も子どもも日本語と英語の間でジレンマにおちいるリスクがある

《その他補足として》

- ・1人1人の個性に対しての配慮や年齢に合った学びが見られる場合が多い
- ・カリキュラムによって専門家を呼ぶため、男性を含め幼いうちからいろんな人に出会える
- ・アイデンティティー・ロス（自分は何人なの？と自分はどこの国の所属なのか悩むこと）におちいる場合がある
- ・日本の小学校に進学するなら、周りから利己的に思われてしまう可能性がある

《まとめ》

まず、英語の環境は理想的です。幼い時期からたくさんの英語を聴け、心に壁も小さく、ネイティブの様に、ナチュラルな形で英語を学ぶことが出来ます。

ただ、バイリンガルにするのであれば注意が必要で、**特に家での対応が必要不可欠**になります。家での対応によっては、英語と日本語のどちらもが中途半端になるリスクがあるからです。

そうならないためにも、まずは「何語」の小学校に行くかを踏まえて、日本語なのか英語なのか将来的なメイン言語を決める必要があります。

そして、家庭ではメイン言語で過ごす、特にメイン言語の絵本をたくさん読むなど、子供が楽しんで取り組んでくれるアプローチが大切です。

逆に公文式のような「勉強的なアプローチ」はしないことです。

これは決して公文式を否定しているわけではなく、例えとして用いただけで、「勉強的なアプローチ」が幼少期の子は耐えられないケースが多く、最悪の場合、そのメイン言語が嫌いになるケースもあるからです。

そうなってしまっただけは努力も水の泡ですので、インターの場合もそうですが、ゴールを明確にしてご家庭で楽しみながら、そして子供にも楽しんでもらいながら、細く長く取り組むのがベストだと思います。



その4：ヒロック式「バイリンガル教育」

「その3」で、バイリンガル教育を行う上で、日本式幼稚園とインターそれぞれのメリット・デメリットについてお話ししました。

私は日本人として、日本式幼稚園もインターもそれぞれ良い部分はたくさんあると感じています。何に価値を置くかでも良さは変わってきます。

ただ、「こういうところ”もったいない”よね。。」とどちらにも感じてしまう時があります。

それも踏まえて「**その4**」では、そういうお互いの”もったいない部分”をベースに、ヒロックではどのようにバイリンガル教育を行っているかを少しご紹介したいと思います。

ご家庭でも参考になるポイントについても書いていますので、ぜひこちらも楽しんで読んで頂けると嬉しいです。

まず、バイリンガル教育を進める上で、

- ①**幼少期にはじめる（聴く力が強い、心に壁がない）**
- ②**一定量のインプットを行う**
- ③**愛情ある生きたコミュニケーションの場・機会を確保する**

ことが大切だと説明しました。ここはHILLOCK（ヒロック）でも特に重視しています。

【①完全英語】

日本という地で「バイリンガル」を目指すのであれば、幼少期のうちに、多くの英語インプットを行う必要があります。

日本で生活していると、圧倒的に日本語が入りやすい環境にいますので、HILLOCK（幼稚園）では、「**完全英語環境**」で学んでもらいます。

3年間で3000時間を英語で過ごし、英語コミュニケーション力の基礎作りを行い、年間200冊の絵本を読み、読み書き教育もしっかり行います。

逆にここで徹底的な英語教育を行うので、ご家庭では日本語教育に重点を置くメリットもあります。

一步、幼稚園の外に出れば、自然と日本語を耳にする環境なので、トータルでバランスの良いバイリンガル教育を行うことができます。

日本の幼稚園に通われるご予定であれば、ぜひ音楽を聴いたり、英語絵本を読んだりなどご家庭で英語に触れる、インプット出来る機会をたくさん作ってあげてください。

ここで注意して頂きたいのが、前にも述べましたが「勉強的なアプローチ」はやめて頂きたいということです。

仮にサブ言語を英語にする場合でも、勉強的なアプローチで英語嫌いになってしまうと、なかなかそこから取り戻すのは難しいからです。

ヒロックでも、読み書きなど英語「を」学ぶ技術論は1日30分と最小限にしており、英語はあくまで環境としてアクティビティを楽しんでいく体験型・探求型のスタイルで行うアプローチをメインにしています。



【②少人数制】

「バイリンガルは言葉だけではない」と私は思っています。

言い換えると、バイリンガルは日本と海外、その場の状況に応じた振る舞い
が出来ることも大切だと言うことです。要は「文化理解」です。

例えば、日本語メインの小学校に進学させる予定の場合、インターナショナルスクールに通うと、小学校に進学した際に、どうしても日本の集団主義的
教育（例えば、生徒みんな同じ行動をする、一緒であることが良いなど）を
心配される保護者の方がいらっしゃいます。

個性を重んじることは非常に素晴らしいですが、そこに偏りすぎると、周りの日本人の感覚からは利己的だと感じ取られてしまい、なじめないケース。

仮にそうになってしまい、それが原因で子供が落ち込んでしまうと、個性や才能の芽も潰れてしまいかねません。それは非常にもったいないと思います。。

ですので、インターの個性を重んじる文化と日本的な和を重んじる文化、それぞれの文化に順応できること。

つまり、自分らしさを大切にしながら、様々な文化や考え方を尊重することはこれからの時代にとっても大切です。この重要性は強調しすぎることはないでしょう。

そこで、HILLOCKでは、日本の文化背景も理解した上で、個性的に伸びやかに育てもらうアプローチを行います。

その方法が「**少人数制**」です。

インターでも少人数制を取っているのですが、ただ少人数にすれば良いと言うわけではなく、ヒロックは1クラス「15名」で「2名のスタッフ」を置きます。少人数とうたっているインターでも「20名」のクラスがあるようです。

1名は英語ネイティブ、1名は日本の保育士資格を持つバイリンガルが担当し、両方のカルチャーに配慮した形で進めます。

また、彼らは「先生」ではなく「ラーニング・シェルパ（山岳ガイド）」という位置づけで、指示する存在としてではなく、ともに歩む仲間、時に導く信頼できるプロフェッショナルとして活動を共にします。上下ではなく、横か斜めの関係です。

その様なクラス設定にすることによって、より1人1人にあったサポート、そして1人1人がコミュニケーションをしやすい機会を構築しています。

例えば、なぜこういう時にイスに座らないといけないのか？など「マナー」に関して教えないといけない時。

単に座ることを指示するのではなく、1人1人と丁寧に話し合うことで「その場の状況に応じた振る舞いをするのが大切だ」ということを、生徒さんと先生が心とアイデアをシェアすることで頭で理解してくれます。

また、ともに力を合わせるCollaboration（協働）はぜひ身につけてほしいスキルとして意識的に活動に組み込んでいます。

これが20人以上を一人で持つ大人数のクラスだと、どうしてもクラスを回るのが精いっぱい、一人ひとりの気持ちや個性を受け止めるのが難しくなります。

丁寧に対応したくても物理的な限界がある、これが日本の幼稚園など大人数施設の実情です。

またHILLOCKのカリキュラムでは、Social Study（社会）の活動で、様々な国のカルチャーに親しんでいく時間があり、頭と心と身体を使って、どちらの文化も理解し尊重することを学んでいきます。このような世界を視野に置くアプローチはインター的な良さだと思います。

これらはご家庭でも応用可能です。ご家庭では（もちろんされていると思いますが、）、お子様と愛情ある生きたコミュニケーションの機会を常に作ってください。

そして、1つ1つの出来事に、なぜこうしないといけないのか？などを話し合いながら、心とアイデアをシェアして頂く。

あるいは、様々な国の文化に興味を持つような活動をして頂ければ、バイリンガルになる上で大切な「状況を理解した上で、そこに応じた振る舞いが出る」子供に成長してくれるはずです。

【③自然とのふれあい】

「バイリンガル教育」に直接関係ないと思えるかもしれませんが、実は「**自然とのふれあい**」が長期的にバイリンガル教育において様々なメリットがあります。

自然と触れ合うと、思考力や感性が磨かれますので、興味が増える、世界が広がる、心が豊かになるなどです。

「自然を見る→心が動く→言葉をはじめとした表現につながる」そんな自然な学びが言葉だけでなく成長を底支えしてくれます。

とは言うものの、残念ながら、多くの幼稚園やインターは住宅エリアにあることが多いです。

そこで、HILLOCKは、自然豊かな公園に隣接した立地を生かして、自然とのふれあいを多くカリキュラムにも入れています。毎日隣接した広大な自然豊かな公園内でアウトドア活動をし、週に1回はランチを持ってピクニックに出かけます。

自然とのふれあいを行うことで、感性を刺激し、また身体を動かしながら英語を耳からでなく、遊びを行いながら体全体で英語に触れてもらうので、「英語＝楽しい」という感覚になり、英語への抵抗感なく自然な形で身につけていきます。

ですので、自然とのふれあいが「バイリンガル教育」にとっても大きな働きになるのです。

ぜひご家庭でも、自然に触れる機会を出来るだけ多く持つ様にしてください。

【④STEAM教育（Science, Technology, Engineering, Art, Mathematics）】

バイリンガル教育は「細く長く楽しく」がキーワードです。

ですので、「英語をいかに楽しく継続するか」については頭を使う必要があります。英語が勉強になってしまっはつまらない、楽しむ活動の環境が英語であることが大切です。

そこで、HILLOCKでは、世界の先進的学びに関する調査に基づき、STEM（理系教育）、Social Studies（社会）、Art（芸術）、Entrepreneurship（起業）、自然教育を横断的に取り入れた「好奇心バクハツ・カリキュラム」を取り入れています。

そのカリキュラムでは、基礎知識だけで終わらず、とにかく「英語で学び」「作る」「表現する」経験を重ね、本人の興味や好奇心を引き出しながら「英語＝楽しいもの」というイメージを持ってもらいます。それによって、楽しみながら自然と英語も身につくのです。

ご家庭では難しいかもしれませんが、お子様が興味があるものに「英語で」学んでもらうなど、好奇心や興味に何かしら「英語のエッセンス」を加えられないか考えて頂くと良いと思います。



その5：最後に

これまでの内容はいかがでしたでしょうか？少しでもあなたのバイリンガル教育の参考になれば嬉しいです。

最後に「**その5**」では、私の実体験も踏まえながら、HILLOCK設立への想いについてお話しできればと思っています。もう少しだけお付き合いできれば嬉しいです。

私は学生の頃から、海外留学ならず”海外放浪”に出たり、MBA留学でしっかり海外で学び、社会人としてシンガポール駐在を経験するなど、いかにも「英語に苦労していない人生」だと思われることが少なくありません。

しかし、本音を言うと、英語学習は本当に辛かった。。。苦行でした。

特に『聴く』ことに関してはかなり苦労しました。

まず海外留学に行った時に相手の言ってることがわからない。大学受験に合格したので、それなりに英語を学んでいたものの、やはり生きた英語は全然違うのです。

アクセント、イントネーション、会話表現など、これほどまでに聴けないのか、とショックでした。英検などのテストのように、ゆっくり丁寧に話してくれません（日本語でも普段の会話はそうですよね）

そしてMBA留学は、ネイティブ達とも混じって英語で専門的なビジネスを学ぶので、早い英語が聞き取れない、ディスカッションもズタボロでした。ランチタイムで時事問題やドラマの話になるとトピックすらわかりません。。

2年間海外にいたらなんとかなると思ってましたが、なんともなりませんでした。。うちのめされました。。

シンガポール駐在も、商談などこれまた英語に悩みましたが、ようやくここでなんとか仕事になるレベルにはなれたくらいです。

完全に英語を舐めていました。留学すれば何とかなるだろうくらいに考えていたのですが、思ったほど上達しないのです。もしかしたら私の耳は人より悪いのかもしれませんが（泣）

そんな経験を通じて私が感じたことが2つあって、

- ①「英語好き以外の人には、大人になってからの英語は苦行」
 - ②「幼少期から聴く力を中心に”細く長く”英語を続ける方が良い」
- です。

こんなことを言うと、「海外に行ったのは英語が好きだったからではないのですか？」と聞かれるのですが、英語が好きというよりは「世界に羽ばたきたい。そのために英語が必要だった」という不順な動機からでした。（笑）

英語が好きだったのは小学校の頃だけで、その頃は当時の英語の歌は今も覚えているくらい熱中していました。

ところが中学高校になると、学校の勉強のみだったんです。いわゆる「受験英語」です。

「英語＝楽しい」という関係性ではなく、「英語＝良い点数を取るためにやらないといけない”義務”」みたいに思っていました。

とにかく英単語や文法を暗記するがメインだったので、この時期に「音」で英語に取り組まなかったことを今でも強く後悔しています。（誰も、文科省も「音で取り組む」ようにとは言ってくれなかったことを恨みます。笑。というより、英語でディスカッションできる教師って当時いたのかも不明です。）

英語はまずはとにかく音が聴きとれるかどうかが1つ目の大きな分かれ目です。

英語好きな小学校の頃からコツコツと楽しく熱中して長い期間、たくさん聞きながら英語に取り組んでいれば、きっと大人になってそこまで苦労しなかっただろう。と今でも思っています。

あなたも「**幼いうちから英語をやっておけば、、、**」などと思いませんか？

そんな自分の苦い経験もあって、幼い頃から「英語＝楽しい」と生徒さんに感じてもらえるようなカリキュラムを作ろう!というのが、今のHILLOCKのベースになっています。

ただ、この英語が楽しいと感じてもらおうカリキュラムを考えると同時に、無視できなかったのが「**子供を取り巻く環境の変化**」だったんですね。

特に「自然や人とのふれあい」がどんどん減っていると感じざるを得ませんでした。

都市開発による遊び場の縮小、共働きによる親子のふれあいの少なさ、習い事による忙しい子どもの増加など。

でも、その一方で、未来は人工知能、グローバル化、少子高齢化など、社会はどんどん変化していき、誰にも予測不可能な未来になっていく一方だとも感じていました。

このレポートを読んでいるあなたは、どんな未来になろうとも「**子供の幸せ**」を願っているのは言うまでもないと思います。

だからこそ私は、HILLOCKを立ち上げた仲間と共に、「このままの教育で良いのか？」「子どもが幸せな人生を送れるために必要な教育とは何か？」について今一度、向き合う必要がありました。

そこで、私たちが感じた問題意識は、

- 1：都会における自然や人のふれあいが薄くなっていないか？
- 2：大きく変わる世界への対応は十分なのか？

3：日本の教育は選択肢が少ないのではないか？

の「3つ」でした。

もしかしたらあなたも、少なからず1つでも同じ意見を持っているのではないのでしょうか？

ただ、私たちはそれらの問題を解決できる1番の原動力がやはり『楽しい！』にあると考えています。

そして、その「楽しい！」と織り成す様々な「キーワード」との組み合わせこそが、誰も想像の出来ない未来でも「子どもが幸せな人生」を歩める大きな“きっかけ”になるとも感じています。

「自然」と「人」とたくさんふれあい、トコトン“楽しむ”。それを英語環境で行う。

楽しいからこそ、もっと身体をたくさん動かしたいし、もっと自然と人ともっとふれあいたくなる。

「少人数制」にすることで、一人一人の様子をしっかりと受けとめることが出来、まるで家族の様に“楽しいを密に共有”できる。

だからこそ、「自己肯定感」が育まれ、「個性」を伸び伸びと育てることができる。

「バイリンガル環境」にすることで、“英語でも楽しめる”。

楽しめるからこそ、日本と世界、多様性の理解が受け入れやすく、そして選択肢すらも広がっていく。

「先進の学び」を「遊び」と融合した「体験」を提供することにより、“知的に楽しむ”ことができる。

知的に楽しめることで、さらなる「探究心」が生まれ、さらなる個性を育てることができる。など、この「楽しい！」が根本にあるからこそ、様々な問題意識も解決できると私たちは信じています。

そして「楽しい！」をベースに、「自然」「遊び」「少人数制」「自己肯定感」「個性」「バイリンガル環境」「先進の学び」「体験」「探究心」これらをキーワードにした「子どもたちが伸び伸びと育つ場（＝ソダチバ）」を創ろうと思い、設立したのが「**HILLOCK**」なのです。

私たちは、ここに通ってくれる子どもたちみんなが「人と比べることなく、自分らしく楽しむ」そんな「幸せへの第一歩」を踏み出して欲しいと強く願っています。

また、そんなソダチバなHILLOCKをあなたとも創っていただけたらなお一層嬉しいです。

長くなりましたが、少しでも最後のコラムがあなたにとって気づきのあるものだと私としても嬉しく思います。

そして、感想や質問などございましたら遠慮なく、以下にあるご連絡先にお知らせいただければ幸いです。

【問い合わせ】

<https://www.hillock-school.com/contact/>

メール：hillock.meguro@gmail.com

ここまで長々と話をしてしまいましたが、あなたとお子様の幸せを切に願っています。

ありがとうございました。

HILLOCK代表
堺谷武志（さかいたに・たけし）

【堺谷武志の略歴】

京都大学工学部、南カリフォルニア大学MBA（経営学修士）、保育士
都市銀行（現三菱UFJ銀行）でシンガポール駐在を経て、本部にて国際ビジネス（アジア戦略立案、海外金融機関買収など）に従事。

2006年自然と人にふれあうプリスクール「キッズアイランド」を設立、13年間で1,200名超の子どもとふれあう。

2019年NPO法人ソダチバ・プロジェクトを教育起業家仲間と立上げ、新たな選択肢「HILLOCKバイリンガルキンダースクール」を創設。

近い将来「HILLOCK小学校」創設計画あり。

プライベート：妻と一人娘の手下、週末登山と再結成したバンド活動の活発化が課題、チカラ強さはゼロだが拳法有段者でもある。

【HILLOCKバイリンガル・キンダースクール】

「自然と人にたっぷりふれあい、バイリンガル環境で先進の学びを！」
都会にいながら自然重視、先進の学びを取り入れたカリキュラムによって
「Wild & Academic」な場を実現しています。

保護者からは「少人数制で本当に丁寧」「公園がいい」「英語力を実感」「遠足、STEMなど活発」、子どもからは「楽しい！」「好き！」との声が聞かれます。

現在、目黒キャンパスと駒沢キャンパスの2校で活動を行っています。

HILLOCK HPはこちら：

<https://www.hillock-school.com/>